

新 入 生 特 集 号

大学生の勉強と図書館 (館長) 1

新入生に薦めたい本 2-4

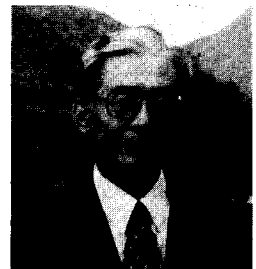
新入生のための利用案内 5

ライブラリー・オリエンテーションのお知らせ 6-7

静岡県大学図書館協議会 (仮称) 設立準備会報告ほか 8

大学生の勉強と図書館

附属図書館長 久 保 靖



何年か前のことだが、ふとテレビの大学受験講座を見たら若い女先生が源氏物語の講釈をしていた。それが実に見事な教えっぷりで、つい最後まで見惚れ聞き惚れてしまった。私の語彙では色事とか情事とかしか思い浮かばないところをラブストーリーなどと軽やかに表現し、文章の構成や文脈の手際良い解説と、軽快な話のテンポが時の過ぎるのを忘れさせた。記憶が違っていなければ、ハートのマークをあっちこっち張り付けたりしていたように思う。女子短期大学国文科の先生であったが、おそらく進学塾の有名講師でもあるのだろう。新入生達がこのような授業を受けて勉強してきたとすれば、大学で受けるオジンやオジイの講義が面白からう筈がないと思った。講義と講談とは話術という点で共通するものがあるから、教壇で教える大学の先生も高座をつとめる芸人と同じような修業をつむ必要があるかも知れない。しかし、話芸の才能があれば教師になるより講談師になった方がよいかと思うから、所詮大学の講義に面白さは期待できないと観念してもらう他ない。

本来、学問というのはそんな口当たりの良いものではない。私も大学に入ってから学んだ化学熱力学や量子化学が本当に難しく、頭も胃も痛くなった。当時の大学の先生はわかりやすく話そうという気はなかったようだし、平易な本というのもなく。平易にすると有難味が薄れるし、権威も損ねられる。私もこんな文章を書いてはいけい。しかし、大学がこう大衆化してしまつては、もう権威もへチマもなからう。はじめから厭にならないように、導入時に面白くわかり良く教えてもらうのは有益なことである。しかし、いずれは自分の頭を搾らなければならないことには、今も昔も変わりかない。

追い打ちをかけて言えば、授業で取り上げられることは学ばなければならないことの一部でしかない。残りは自分で勉強しなければならない。今日々の学生さんは、携帯電話だのパソコンだの、本以外にも買わなければならないものがたんとあるようだ。本は図書館を利用するというのが経済になる。その折、書架の前をぶらぶらして本の背表紙を眺め渡すことが、自分の専攻分野の良い鳥瞰にもなるのだから、得ばかりである。

新 入 生 に 薦 め る 本

本記事は、平成8年度学生用図書選定委員の先生方から特に新入生のために若干のコメントとともにご推薦いただいた図書です。各コメントの最後の“[]”内は当館の所蔵状況及び配架場所を示しています。また[*]印は絶版等を除き開架図書として受入予定のものです。人間が一生の間に読むことができる図書の量はわずかです。あなたにとって素晴らしい図書に出会うことを願ってやみません。

「そうかもしれない」 (耕治人著 講談社 1988年)

「私」は現在81歳だが、小説のようなものを勝手に書いて来て、収入が乏しい。それを、私にせがまれて結婚した妻が、愚痴一つこぼすことなく働いて、ずっと補ってきた。自分と同年の、その妻が、最近呆けの症状を表す。ある夜、妻はベッドから落ちて座り込んだまま、小水の溜りを作った。「私」は重い妻の体を動かせぬまま、「清い小川のような」小水をふき、沸かした湯で、妻の腰から足の爪先まで拭きはじめた。それを見ていた妻が、「どんなご縁で、あなたにこんなことを」と呟く。(不治の病で作品完成直後生を閉じる)「私」は、自らの病の苦痛が妻への罪悪感を軽くするのを感じる。…「どんなご縁で」外2篇から成る。年齢を問わず必読の書。[*]

(教育学部助教授 久島茂)

「古語雑談」 (佐竹昭広著 岩波新書 1986年)

書名はコゴゾウタンと読む。ザツダンという読みは明治20年代の辞書に始めて現れるという。歴史を少しさかのぼると、日本語の姿が様々に変化する。「不便」と「弁当」は関係がないようだが、もともと反義対だった。「不便」はもと「不弁」と書き、《思うにまかせぬ不如意》とか《貧乏》の意味だった。一方「弁当」は「便当」とも書き、《便利》や《裕福》の意味だったが、室町時代の末に、便利な容器ということから《弁当箱》の意味を持つようになったという。上代から近世まで、120語余りが取り上げられている。知識を広げ深める書物。[S810.23/SA83 開架]

(教育学部助教授 久島茂)

「カウンセラーが語る こころの教育の進め方 ー “生きる意味と目的”を見つけるためにー」 (諸富祥彦著 教育開発研究所 1996年)

若い臨床的教育学者が、「心のむなしさ」「人間関係能力の低下」という視点から子どもや若者の「心の問題」に迫った本である。カウンセリング等の豊

富な実践例をもとにしつつも、臨床心理学の枠に収まりきらない広がりをもって「出口」を展望している。関心を持った人は、同著者が自己変革を説いた姉妹篇「カウンセラーが語る 自分を変える<哲学>」(教育開発研究所 1996年)や、より学術的な「人間形成における<エゴイズム>とその克服過程に関する研究」(風間書房 1994年)も参照されたい。[371.43/MO77 開架]

(教育学部助教授 菅野文彦)

「ハンドブック 子どもの権利条約」 (中野光・小笠毅編著 岩波ジュニア新書 1996年)

「子どもの権利条約」に関する豊かな研究をもとにした平易な入門書である。様々な角度から「子ども固有の権利」を唱える条文をもとに、親・保護者、学校教師、国家の責任を鋭く問うている。条約で「18歳未満」とされる「子ども」を終え、「大人」の仲間入りをしたばかりのすべての人に、改めて読んでほしい本である。類書は極めて多いが、同著者のものとしては、小笠「ハンディをもつ子どもの権利」(岩波ブックレット No. 399 1996年)等があるほか、中野「現代を生きる教師の思想と実践」(国土社 1996年)も関連して読まれるべき本である。[369.4/N39/S 開架]

(教育学部助教授 菅野文彦)

「サウンド・エデュケーション」 (R. マリー・シェイファー著 鳥越けい子他訳 春秋社 1992年)

著者M. シェイファーは、カナダの作曲家であり、音楽教育の新しい方法を模索し、環境音を含めた音づくりを提唱した人物として知られています。きくこと、分析すること、つくることを通して、子どもたちのもつ創造的可能性を引き出そうとした彼の試みは、我が国の音楽教育にも大きな影響を与えました。音環境デザインの課題集ともいえる本書は、環境創造に関心をもつ人にとって、必読の書といえるでしょう。[*]

(教育学部講師 坂田薫子)



『音楽療法の基礎』

(村井靖児著 音楽之友社 1995 年)

我が国の音楽療法は今、限らない発展の可能性を秘めながら、加速度的に動いています。1995年には「全日本音楽療法連盟」が発足し、音楽療法士養成や国家資格制度の確立に向けて、その活動が注目されます。本書は、音楽療法に関する概念、歴史、原理などが簡潔にまとめられているほか、病気や障害ごとの活動事例も紹介されています。一貫した平易な語り口によって、療法士を目指す者はもとより、ストレスにあえぐ現代人にとっても、興味深い入門書となっています。

[761.14/MU41 開架]

(教育学部講師 坂田薫子)

『種の起源』

(チャールズ・ダーウィン著)

この本は生物の進化に関する偉大な本です。今の生物学は進化の考え方ぬきには成り立ちません。この本は150年も前に書かれたものであるにもかかわらず、その説くところは今でも生きています。生物学、いや、自然科学を志す人はぜひ一度読んでほしい古典です。正直なところ、けっして読みやすい本ではありません。しかし、ダーウィンが一所懸命書いた本です。皆さん、大きな山に挑戦する気持ちで夏休みにでも読んでみませんか。

[467.5/D42/B1 開架-岩波文庫版ほか][*]

(農学部教授 西垣定治郎)

『グスコブドリの伝記』

(宮澤賢治著)

これは童話です。宮澤賢治特有の幻想的で美しい童話です。短編ですから、半日もかからずに読めてしまうでしょう。しかし、そこには科学者のあるべき姿が理想的に描かれていて、意味するところは重いものがあります。当時の東北地方の冷害を思わせる情景が描かれ、その中で育ち、学び、そして死んでいく主人公の一生を読むと、同じ農学を志す私は、いつも胸が熱くなるのです。なお作者の宮澤賢治は実際に農学者でもありました。

[913.8/Mi89 開架-岩波版ほるぶ図書館文庫『風の又三郎他18篇』に収録、ほか]

(農学部教授 西垣定治郎)

『孤独な群衆』

(D. リースマン著 加藤秀俊訳
みすず書房 1964 年)

「人文社会系の大学生になったら、必ず読む本

の1つだ。」と今から十数年前に大学生になったときに先輩から薦められた。原著の初版は1950年だから、今や社会科学の古典の部類に入る。しかし、その分析の精彩さはいまだに失われてはいない。他者の期待や願望に沿うようには行動するという現代人の他者指向型の性格は、著者が対象とした当時のアメリカの中産階級のみならず、現代日本社会にもよく当てはまるように思える。

[361.6/R38 開架]

(情報学部講師 井川充雄)

『メディア・イベント』

(D. ダヤーン、E. カッツ著 浅見克彦訳
青弓社 1996 年)

著者らは現代社会におけるマス・メディアの機能を、「儀礼」という新たな視点から分析した。すなわち、オリンピックや、ケネディ大統領の葬儀、それにチャールズ＝ダイアナの結婚式などメディアを通じて広範囲に同時中継されたイベントを取り上げ、それが全世界を擬似的に統合し、人々の集合的記憶を形成するプロセスを見事に描き出している。日頃見慣れたテレビについて、たちどまって考えてみたいという方にぜひ薦めたい。

[*]

(情報学部講師 井川充雄)

『子どもの宇宙』

(河合隼雄著 岩波新書 1987 年)

いろいろな問題関心を掘り起こして、世の中を幅広くかつ深く見通す眼を養うために最適なのが、「新書」と呼ばれるシリーズです。岩波新書、講談社現代新書、中公新書、ちくま新書など、薦めたい本は限りありません。あえて、河合隼雄氏の『子どもの宇宙』(岩波新書)を薦めるのは、専門の勉強を始める前に、もう一度心の古層に立ち戻って、自分の中の「不安定で心もとない<子どもの宇宙>」を見つめ直して欲しいからです。特に、「子どもと動物」の章は、なかなかだと思います。

[S371.45/KA93 開架]

(人文学部助教授 上利博規)

『君たちはどう生きるか』

(吉野源三郎著 岩波文庫 1982 年)

夏休みのレポート課題にしたこともあり、好評です。題名からすると難しそうに思えますが、中学生のコペル少年が自分の「へんな経験」や「おじさんの手紙」などを通して、次第に考え方が成長するという小説です。大学生にはやさしすぎるかもしれませんが、自分の心に正直に生きること、人と共に生きること、社会の一員として生きることなど、バブルのばか騒ぎでどこかに飛んでいっ

てしまったような生きることの原点を思い出させてくれます。『子どもの宇宙』もそうですが、テレビを消して静かに読んでみて下さい。
[BJ159.5/Y92 開架]

(人文学部助教授 上利博規)

『センス・オブ・ワンダー』

(レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 新潮社 1996年)

著者はアメリカの海洋生物学者でベストセラー作家である。彼女の『沈黙の春』は30年前の版であるが地球環境問題への警告は先見性を示していたと言われている。本書は彼女の最後の作品である。幼子と海辺を歩き、星空や草むらを眺めては大自然の神秘と不思議さを発見し、それを共有する楽しさが描かれる。自然が繰り返すリフレインに思いをめぐらすときかぎりなく私たちを癒してくれる何かがあるという。そして生きていることへの新たな喜びへ通ずる小道を見出すという。どんな小さな生命でも大切に感じる感性がとぎすまされる自然観察の意味を教え、自然の保護のために実践すべきことを意欲づける本だと思う。[*]
(教育学部教授 吉原崇恵)

『まちづくり読本 こんな町に住みたいナ』

(延藤安弘著 晶文社 1990年)

本書は、自分たちの住む町は自分たちの手でつくりたいと考えて立ち上がった住民たちの生きる姿をルポルタージュの手法で記録されたものである。子どもたちも老人たちも自治体も専門家も登場する。水俣市のもやい(漁の共同、共有を意味する)の精神を町並みづくりに具現化した例や世田ヶ谷区の子どもの冒険遊び場をつくり運営する区と住民と学生ボランティアの姿がある。まちづくりがいかに人間的な営みで人々のエネルギーを活かすことが出来るものかを知り、そのためにはたらくことに自分の有効感を感じるだろう。生涯学習のあり方と読むこともできる。[318.7/E59 開架]
(教育学部教授 吉原崇恵)

『深海生物学への招待』(長沼毅著 NHKブックス 1996年)

『海洋の科学：深海底から探る』(蒲生俊敏著 NHKブックス 1996年)

“みなさん、いま、深海がおもしろいですよ”という様な普及本が、続けて2冊出版されました。1970年代の後半、深海底を直接人の目で見やろうという研究が盛んになってきましたが、最初世界をリードしてきた潜水船は、アルビン号(アメリカ)やノチール号(フランス)でした。日本では、1983年“しんかい2000”が、19

91年“しんかい6500”が活動し始めました。その結果、この本にあるような知られざる世界が、次第に明らかになってきたのです。最近のテレビ番組を見てみると、南極・北極であろうが、今やこの地球上には全くの未知の世界などどこにもないのではと思われます。しかし、世界の海の大部分、この暗黒の深海底だけはつい最近まで例外的でありました。だから、ジュール=ヴェルヌの海底二万里のように、想像力をかき立てる場所であったと思います。しかし、この本で明らかのように、目で見た事実がはるかに想像力を越えるのであります。確かに深海は静かな世界です。そこには数百気圧下の生命の営みと地球の鼓動が聞こえます。読みやすく新入生におすすめできます。
[*]
(理学部教授 和田秀樹)

『太古の海の記憶—オストラコーダの自然史』(池谷仙之・阿部勝巳著 東京大学出版会 1996年)

海の話ばかりで、新入生への本の紹介としては少し分野が偏っているかも知れませんが、静岡大学に入ってきたみなさんに是非一読をお薦めしたい本なのです。それはこの本の著者二人が本学教官であり、中心舞台は静岡大学であり、みなさんの先輩たちが重要人物として登場している本だからです。オストラコーダ(日本名：介形虫)という、1ミリほどの小さな甲殻類を研究するグループが、日本で、静岡でどのように生まれ育ったのか、その人の輪は世界にどのように広がったのか、著者二人の往復書簡と対話で描かれています。人が工夫した技術や考えなどを受け継ぎ発展させて行くのが文化だとすれば、この本は「大学人がいかにして文化を支え、新たな文化を生み出していったか」という小さな文化の履歴書ともいえるでしょう。みなさんが大学に入るまでは、大学の研究機関としての一面はあまり伝えられていなかったと思います。あたり前のことなのですが、大学の研究を支えてきたのは教官だけではなくみなさん方学生の力(Student power)であることが全編を通して紹介されています。また、手紙形式ということで個人的な挿話や登場人物の喜怒哀楽などがすんなりとなじんだ文章となり、内容の割に読みやすいと思います。失敗談は余り語られていませんが、研究には失敗も付き物、研究上の人間くささもとうがらしのようにアクセントをつけ、それでも研究し、何かを発見するするおもしろさが伝わることと思います。内容はだいたい専門的ではありますが、わからなければ直接著者らを訪ねて見てはいかがでしょうか。[*]
(理学部教授 和田秀樹)



新入生のための図書館利用案内

< 図書を借りる手順 >

利用票を①貸出カウンターで受け取る

学生証を提示

本を探す

③利用者端末または
④目録カードで検索
してから書架を探す

①貸出カウンターで
貸出手続

館内で閲覧
(元に戻す)

*手続きをしないで
②を通過するとブザーが鳴る

5冊まで
1週間
(学部生の場合)

貸出利用

図書をもって①へ

返却

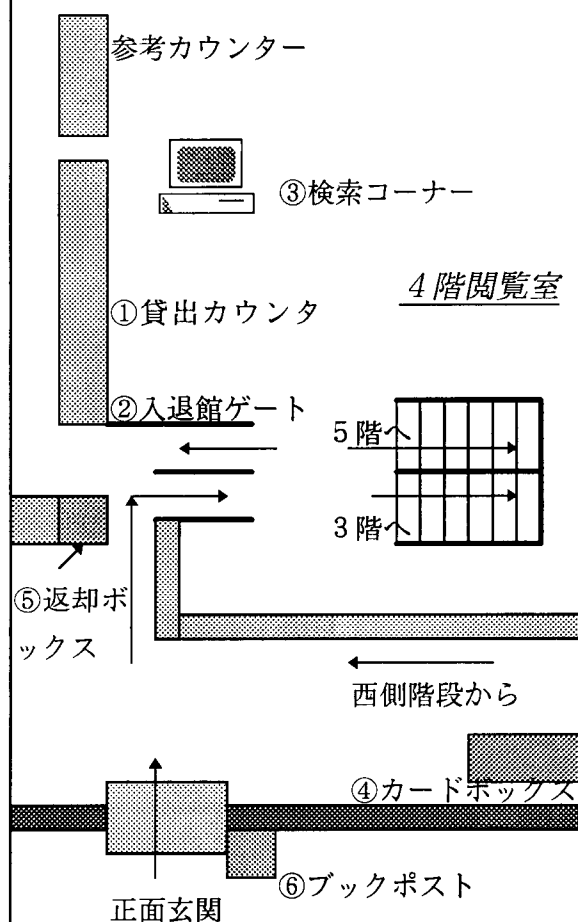
貸出更新

3回まで更新 OK

⑤返却ボックスへ

閉館時は⑥ブックポストへ

< 窓口案内 > 4階窓口付近案内図



< 各階案内 >

3階 AV ルーム、外国雑誌

4階 参考図書、雑誌

5階 学生用図書

* 1・2階は書庫になっています。

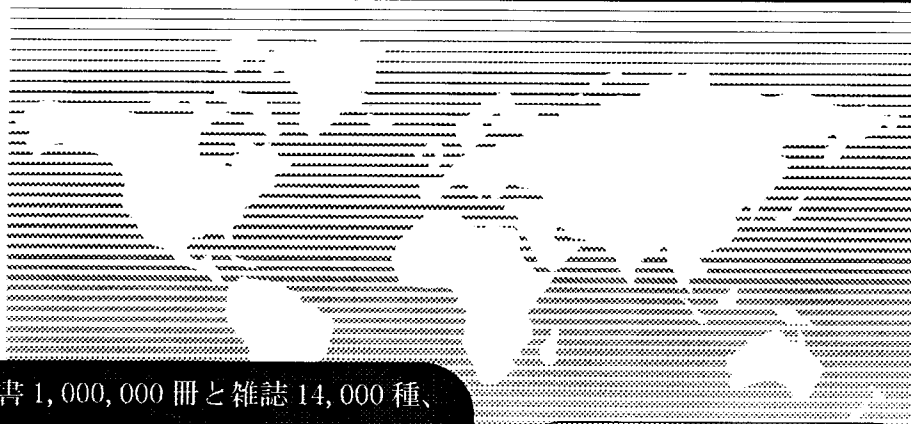
< 図書館利用にあたってのお願い >

①開架図書は閲覧後必ず元の位置に戻して下さい。

②図書は返却期限内に返却してください。遅れると遅れた日数だけ貸出できなくなります。

* 不明な点がありましたら、気軽に窓口にご相談ください。

新入生のための ライブラリー・オリエンテーションのお知らせ



静大附属図書館の図書 1,000,000 冊と雑誌 14,000 種、そして、全国の図書館・機関の蔵書も検索できるようになります。インターネット利用のため世界中にアクセスすることも可能です。

新入生でなくても、これから図書館を効率的に利用したい方はどうぞ!!

Part 1 図書館の活用法

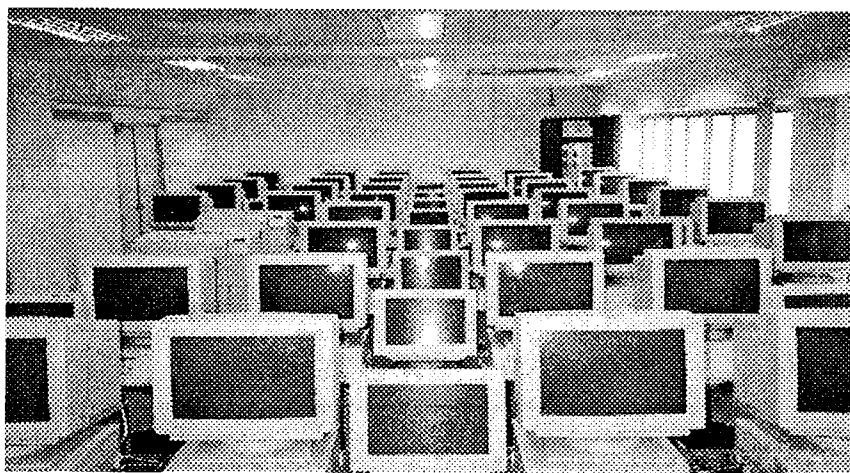
日時：4月14日(月)～4月25日(金)

月、水、金：15:00～16:00

木：13:00～14:00

場所：情報処理センター分室実習室2(共通教育棟 L 棟)

今年は「情報処理センター実習室」で開催できるようになりました。インターネットに接続した 50 台の端末が並んでいます。隣にはモニターがあり、講師の画面が表示されます。検索の説明では、一人一人が実際に操作できるようになっており、完全に習得できるように職員が補助します。



Part 2**もう一つの OPAC と CD-ROM の検索法**

日時：5月6日(火)～5月9日(金)

14:00～16:00 (随時)

場所：附属図書館4階 検索コーナー

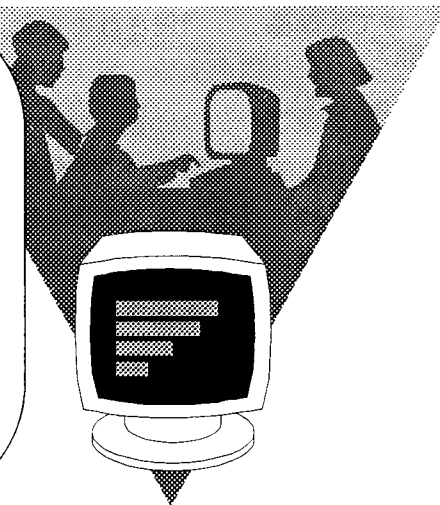
OPAC

コンピュータによる利用者のためのオンライン目録のことを『OPAC(オパック)』といいます。静大附属図書館には2種類のOPACがあり、検索方法が異なります。

Part1ではインターネット上で公開されているOPACを、そして、Part2では図書館専用機の端末(カウンターの側の3台)によるOPACの使い方を説明します。

端末の空きがない場合には、他の人の操作を見て理解して下さい。オリエンテーション用の例題も用意しますが、自分の探したいものを予め考えておく方がよいと思います。

分からない時には職員にどんどん聞くようにして下さい。

**CD-ROM**

CD-ROM(Compact Disc Read Only Memory の略)は音楽用のCDと同じ方式でデータを記録したものです。記憶容量が大きいため、データベースや辞書を入れてパソコン等で検索するもので、新聞1年分のデータがCD-ROM1枚に入ってしまいます。

検索コーナーにはCD-ROM用のパソコンを6台設置し、以下のソフトが自由に利用できるようになっています。

- ① 国立国会図書館蔵書目録(1948～) ② 雑誌記事索引(国会図書館作成 国内主要誌約5,000誌を対象 1985～)
- ③ 朝日新聞全文記事索引(1989～) ④ 学術雑誌総合目録〔全国版〕1989
- ⑤ Global Books in Print PLUS (現在刊行中で入手可能な英文書籍総目録 最新版)
- ⑥ Current Contents on Diskette with Abstracts (世界の自然科学系主要学術誌の目次速報)

OPAC とカード目録

OPACでは、1988年度以降に受け入れた図書と(すべての)雑誌を検索できます。

1987年度以前に受け入れた図書についてはカード目録で調べることになります。ただし、閲覧室の図書は全てOPACに収録し、書庫内図書についても利用度の高いと思われるものから逐次入力作業を進めていますから、自分が求める資料を目録で探す場合には、まず、OPACで検索し、見つからなかった場合で、出版年が1987年以前の図書については「カード目録」でも調べるようにして下さい。

(受け入れが「カード目録」の年度で、OPACにも収録のものは、簡略データですから、複数著者や副書名等のある図書、或いは内容注記がありそうなものなど、詳細なデータにあたって探したい場合には、カード目録に戻って調べるようにして下さい。)

静岡県大学図書館協議会（仮称）設立準備会開催

日時：平成9年2月26日（水）PM1：30～

場所：附属図書館会議室

静岡県大学図書館協議会（仮称）の平成9年度設立に向けて、準備会が開催されました。

この日は、県内大学・短大附属図書館の館長等14名が出席され、協議会（仮称）の会則（案）及び今後の日程について熱心な討議が行われました。

これまでの経緯について概略をお知らせ致します。

平成7年1月27日、本学の呼びかけにより県内14の大学・短大の図書館長が出席され、「静岡県内大学等附属図書館長懇談会 第1回」が開催されました。その後第2回が平成7年12月5日に常葉学園大学で、第3回が平成8年12月5日に静岡英和女学院短期大学でそれぞれ開催されました。

この懇談会は、県内大学等附属図書館の相互協力を通じて図書館サービスの向上を図り、併せて大学等附属図書館をとりまく諸問題の現状について話し合うことを目的として運営されてきました。

今後この懇談会をさらに発展させ、県内大学等附属図書館のネットワークをより強固なものとし、相互利用、情報の交換、職員の研修等をより一層活発化し利用者の多様な要求に答えるべく組織の整備を図るものです。



静岡大学附属図書館講演会開催

日時：平成9年2月26日（水）PM3：00～

場所：附属図書館会議室

演題：学術情報センターのサービスと教育研修活動

講師：牧村 正史（学術情報センター研修課長）

静岡大学附属図書館講演会が開催されました、この講演会は図書館職員の資質向上のためその時々的重要課題について、講師をお招きして講演いただき見聞を深め日常の業務に役立てていくものです。今回は講演会の前に開催された「静岡県大学図書館協議会（仮称）設立準備会」に出席された図書館長の先生方及び学内・館内から、あわせて約40名が参加し、学術情報センターが計画している最新の情報を得る事ができました。今後大学図書館の「電子図書館的機能の整備」を考えて行く上で、大変参考となるものでした。



あなたの図書館利用票ができています。
貸出カウンタまで学生証持参で！